

月刊 新医療

2015 May

No.485

5

New Medicine in Japan

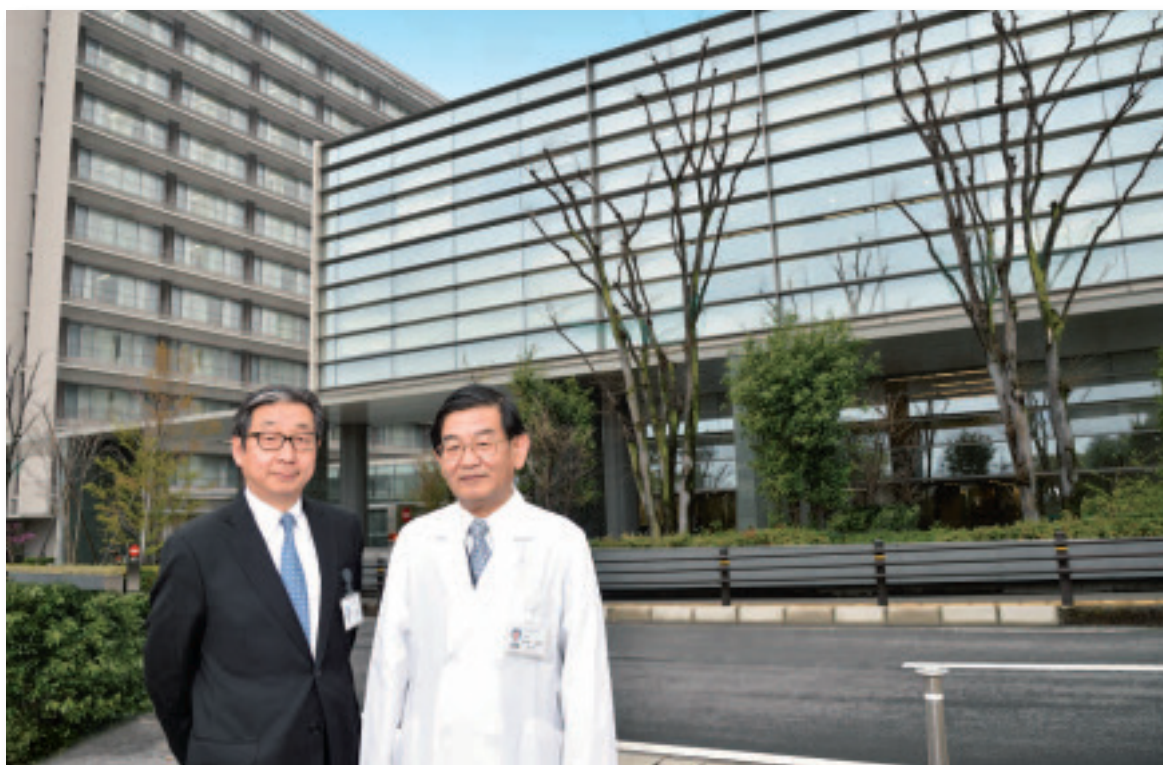
●総特集

手術室の質を最新ITで格段に高める

手技の高度化への対応、効率化追求、安全の担保——さまざまな要件から手術室のIT化が進められている。その現況と効果を探ってみた

●特集

経営・運営視点からの最新超音波の実力



刈谷豊田総合病院(愛知県刈谷市)は、2014年10月に「新2棟」をオープン。各種最新機器導入や健診センターのリニューアル、NICU新設等、機能を大幅に充実させた(詳しくは巻頭グラビア頁)。外来入口の前で井本正巳病院長(左)と馬場理好事務部長(右)

[特別企画]

注目の給食インフラ——その新潮流

[データ]

血管造影システム設置施設名簿 [Part 1]

2014年10月にオープンした新2棟。免震構造による地上8階、地下1階建て、延床面積12,762㎡。1、2階は従来の3倍の広さに拡張した健診センター、3階には37床の小児病棟とNICU、4～6階には個室病床76床、7階には緩和ケア病棟20床を設置し、医療機能の更なる充実を目指している



愛知県 医療法人豊田会 刈谷豊田総合病院

最新機器と新機能を備えた病棟を新設。地域の中核病院としての実力を高めて、市民と会社従業員・家族の健康を守る

1962年創設の刈谷豊田総合病院は、半世紀以上市民病院的病院として地域への医療に貢献してきた。同院は、2003年の新診療棟の開棟以降、病院機能の拡充を図るために建物の改修・新築を順次推し進めてきた。そして2014年10月、NICUや緩和ケア病棟、エリアを拡充した健診センターを中心とする「新2棟」がオープン。同棟には、最新型64列CTや3T MRI等、高性能医療機器が多数導入され、診療レベルの向上に高い期待が寄せられている。同院の診療の現況と、新2棟開設による新たな医療展開について、井本正巳病院長からキーパーソンに話を聞いた。

医療法人豊田会 刈谷豊田総合病院
病院長

井本正巳氏に聞く

——病院の沿革および診療の特徴から、お聞かせください。

当院は1963年の開院当初から企業と市を経営母体としてきましたが、現在は刈谷市と高浜市、トヨタグループ8社が経営にあたっています。いわば民間的手法で経営される地域の中核病院であり、急性期医療を中心としている一方で、地域に必要な不採算部門も担う総合病院の役割も担っています。

直近10数年は、急性期病院における「全国トップレベルの病院」への成長を目標に掲げ、診療の機能強化に尽力してきました。その目標達成に不可欠といえる最新医療機器やITシステムの拡充は、理事長はじめ経営陣の設備投資に対する理解と後押しがあり、ほぼ計画どおり進めることができています。結果、急性期医療の診療実績を想定以上に向上させることができました。例えば近年の年間救急車受入件数は21世紀初頭から約1.7倍に増えており、約9000件で推移しています。これは愛知県のみならず、全国的に見てもトップクラスの実績といえるでしょう。

——病院改革と同時期、救急部門以外にも

建物をいっつも全面改修・新設されています。その目的と概要をお聞かせください。

新病棟の建設は、開業以来使ってきた旧病棟の老朽化が主な理由でしたが、新診療棟および中央棟は診療の機能強化が主目的です。特に中央棟は、件数が急増する手術室を拡充するために新設し、さまざまな工夫を凝らしてあります。

手術室は「20年、30年先も機能が色褪せない」ことを目標に、腹腔鏡手術にフォーカスした部屋や内視鏡センターを造るなど、最新の仕様としました。その上で映像監視システムを導入し、手術室階の1室で術中監視を行うことで安全性を高めるように配慮しています。この監視室は、大震災などにおいては被災者のトリアージや院内処置などを統合管理する災害対策本部として機能します。これも中央棟の特徴の1つとして挙げられます。

また、臨床と直接関係はありませんが、中央棟1階に設置した中央物流センターは、トヨタグループ企業の物品管理を応用した部門です。民間企業の持つノウハウをこのような形で運営に生かせる点も、企業病院ならではの強みといえるでしょう。

柱とする医療進展のために 2棟の建物を全面的に改修。 医療機器も拡充させて配備

——昨年完成した「新2棟」建設の目的お

——よび概要について伺います。

建設目的は主に2つあります。1つは「従来手薄だった医療の補完」、もう1つは「今後柱とする医療の強化」です。

具体的に説明しますと、NICU・GCUを備えた小児病棟は、ハイリスク新生児治療への本格的な取り組みが目的であり、当院が従来対応しきれいかなかった分野を補完するためのものです。将来的には地域周産期母子医療センターの認定取得を目的としています。

緩和ケア病棟は、今後も診療の柱の1つとなるがん医療の近代的ニーズにこたえるためのフロアです。終末期患者の尊厳を守り、家族宿泊が可能な全個室のゆったりとした病室を用意しています。

健診センター、つまり予防医療は今後も

力を入れていく分野です。2フロア構成とした理由は、受診ニーズへの対応とサービ

スの向上が目的です。当院の受診者数は1990年のセンター開設時から2倍以上に増えており、その対応に迫られています。一方で、男女分離を望む女性受診者のニーズに応えるためにも、健診スペースの拡張は必須だったのです。

また、地下にある放射線エリアへの画像診断装置の新導入にも、健診受診者への配慮という狙いがあります。当院は複数分散型の建物構成という事情もあり、放射線部門が3つの棟に分散しています。それゆえ、健診によるCTやMRIの検査を、検査着姿のまま他棟に移動せずに受けられるようにしたかったのです。

なお、新2棟完成により、この十数年続



井本正巳 (いもと・まさみ) 氏

愛知県生まれ。1976年名古屋大学医学部卒。名古屋大学、藤田保健衛生大学を経て、1998年に刈谷豊田総合病院に入職。2000年同院副院長、2012年より同院病院長

いた建物改修は完結したことになります。——以前から最新の医療機器導入に積極的ですが、その理由を教えてください。

当院は企業病院という資金面で恵まれた経営環境にあり、なおかつ経営陣が理解を示してくれるため、以前から装置を導入しやすい環境にありました。結果、当該地域においては、良くも悪くも医療機器が当院に一極集中する状況となっています。それゆえ患者さんも集中しがちで、CTとMRIに関しては新2棟に導入した装置も含めフル稼働中であり、現状の装置数が必須であるのは確かなのです。その観点からいえば、地域ニーズに見合った装置数の確保および拡充は、今までもこれからも当院の重要な使命の1つといえます。

最新医療機器導入のメリットは、医療の質向上以外にも医師や診療放射線技師のモチベーション向上、研修医など人材招聘へのアピールをはじめ、いくつも挙げられます。それらを享受できる限り、今後も最新の装置に更新し続けたいと思っています。——病院の今後の展望について、お聞かせください。

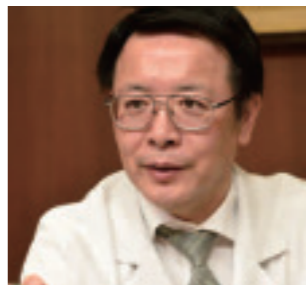
直近十数年の建物改修が示すように、当院が今後、診療の柱に据えているのは高度急性期医療とがん医療です。

高度急性期医療部門に関しては、医療法人内に後方支援を担う慢性期病院が2施設あり、完結型の病床機能分化がなされています。将来的にはこの病床機能分化を地域にも広げ、当院がその基幹を担う高度急性期病院として機能していきたいと考えています。

刈谷豊田総合病院 放射線科

新2棟地下に3T MRI、64列CTを増設し、リニアックも更新。より高度、かつ質の高い放射線診療の実現を目指す

新2棟建設を機に、刈谷豊田総合病院では、放射線科に新しい装置を多数増設・更新した。放射線科の概要と新モダリティについて、放射線科統括部長の水谷優氏、放射線治療科部長の太田剛志氏にインタビューした。



水谷 優 (みずたに・まさる) 氏
1957年愛知県生まれ。1983年名古屋市立大医学部卒。同年同大放射線医学教室入局。天理よろづ相談所病院放射線科、名古屋市立大大学院助手、豊川市民病院放射線科を経て95年名古屋市立大医学部助手。97年より刈谷豊田総合病院放射線科部長。

水谷 優 氏
放射線科統括部長 兼 放射線診断科部長

太田 剛志 氏に聞く
放射線治療科部長

刈谷豊田総合病院の放射線科には、専門医5名を含む8名の画像診断医、放射線治療専門医1名の計9名の常勤医が在籍する。この体制が県内有数であることは言わずもがなである。モダリティは、CTは320列1台、64

列3台を含め計6台、MRIは3T1台、1.5T3台の計4台、RIとしてPET/CT1台、SPECT1台、血管撮影装置3台など、多数を保有している。当然、検査数も膨大なものであり、同科における平成25年度のレポート件数は全体で8万3000件を超える。その内訳はCTが4万8000件、MRIが2万件、X線単純撮影が5000件、RIが13000件、PET/CTが2000件を数え、放射線治療も年間約300名の新規患者が来院する。放射線科の特徴について、同科統括部長の水谷優氏はつぎのように話す。

「当院は、日本医学放射線学会専門医総合研修機関、日本核医学会専門医教育病院、日本IVR学会専門医研修施設に認定されています。この3つ全ての認定を受けているのは、愛知県内では医学部を持つ名古屋大学、名古屋市立大学、愛知医科大学、藤田保健衛生大学の4大学以外では当院のみです。」

さらにIVRに関しては大動脈瘤ステントグラフトの指導医が常勤医として在籍するなど、高度な放射線診療を実施しています。

また、当院では、医療における画像診断が重要な役割を果たしているとの考えに立ち、研修医がローテーションで必ず放射線科で研修を受けるようにしている点も大きな特徴と言えるでしょう。



64列MDCT「Discovery CT750 HD (GE)」。低被ばく技術の導入により、従来に比べて大幅な医療被ばく低減を実現。同院健診センターで、早期肺がん検診やCTC（大腸内視鏡）検査などへの活用が期待されている

画像診断に関しては、特に地域の医療機関との連携に力を入れており、地域医療連携室を介しての開業医からの委託検査はCTが年間2400件、MRIは2100件とレポート件数の10分の1に及びます。

救急搬送に関しても、当院は年間9000件以上と県内1、2位を争うほどの件数を数えます。救急医療の分野でも画像診断の有用性は病院内で認識されており、放射線科では、「画像直」と名付けた日直を配置して、休日・時間外での画像診断に対応しています」

**新2棟オープン
高精度・低侵襲を実現するため、64列CTや3T MRIを増設**

同院では、2014年10月にオープンした新2棟の1階、2階に新しい健診センターを設け、予防医療に力を入れている。放射線科でも、新2棟に被ばく低減技術を

構築したいですね。

——新2棟に導入した、高額な医療機器の経済的効果については、どのようにお考えでしょうか。

3テスラMRIや新型のCTなど、高性能な画像診断装置を導入することが病院の損益にどのような効果を出しているか数値的に判断できないのが現状です。しかし、これらの装置は病院として質の高い医療を提供し、病院スタッフのモチベーションを高める上で必要な投資だと理解しています。

——新しい健診センターについてはいかがでしょうか。

私自身は男性と女性を完全に分離したセンターとしたかったのですが、医師ならびにスタッフを揃えることが難しく、完成形の一步手前という状況です。予防医療の充実のために女性の健診を重視する方向性は間違っていないと考えます。企業健診では、従業員の配偶者の受診率は決して高くはありません。女性が安心して受診できる環境を整備することで、女性の受診率は確実に向上するでしょう。

——豊田会の今後の展望についてお聞かせください。

企業が地域住民に向けて行うことができる社会貢献の中で、最も大きなものの一つは医療ではないでしょうか。この理念に基づいて設立されたのが医療法人豊田会ですが、創設から半世紀が過ぎ、今後もできる限り役割を果たしたいと考えています。

具体的には、患者さんを第一に考えた施設や高度な医療機器を揃え、医療の質を高めることです。このことに真摯に取り組んでいけば、多くの人々に信頼感を与えることができ、それがひいては豊田会に対するイメージ向上につながると思います。

もちろん、赤字が続くような経営はできませんが、医療と企業とを別の視点で捉え、今後も積極的な投資を行っていきます。

Interview

刈谷豊田総合病院
事務部長

ばば だだよし
馬場 理好 氏に聞く

井本正巳病院長とともに医療法人豊田会の理事であり、病院の事務方トップとして病院経営のかじ取り役を務める同院事務部長の馬場理好氏に、経営面での病院の取り組みと新2棟建設後の展望についてインタビューした。

——具体的には、どのようなことに取り組んでいるのでしょうか。

まずは、物品管理の精度を高め、適正な在庫を保つための取り組みとして、医材管理から手を付けています。

医療の世界では、医療材料の管理において、いまだに紙での運用が多く、当院も例外ではありませんでした。外の世界では、ペーパーレスへの動きが当たり前になっていますが、医療の世界では、なかなか難しいのが実状でした。そこで、ミスによる影響が比較的小さい医材分野からデジタルピッキングシステム導入にチャレンジしています。また、医薬品をとっていても薬剤師が検品を行うなど、本来の医療業務とは関係ない仕事を行っており、効率的ではありません。卸業者と協力しながら、精度の高い物品管理体制を敷き、ゆくゆくは医薬品等についても検品無し納入ができるようにしていきます。

——病院経営面での改善にとって、何が課題でしょうか。

病院内部の情報システムは、電子カルテシステムのように医療行為の転記に特化したものが普及していますが、損益判断する上で必要なデータをタイムリーに取り込めないなどの問題点があります。

数年後、電子カルテシステムを更新する予定ですが、新しいシステムでは経営判断するデータを確実に引き出せるようなシステムを

——一般企業から刈谷豊田総合病院に赴任された経緯についてお聞かせください。

刈谷豊田総合病院は、刈谷市、高浜市ならびにトヨタグループ8社により運営されている医療機関です。私は豊田自動織機で営業関連の仕事に従事していましたが、前理事長の豊田芳年氏が同社会長であったことから、病院経営に企業の手法を取り入れるため、事務部長として赴任することとなりました。

当院は、医療と経営の分離を図っており、医療は病院長をはじめとする医療スタッフが、経営は私を含めた事務方のスタッフを中心となって差配している点が1つの特徴です。豊田会の最高決定機関として理事会がありますが、当院からは病院長と私の2名が理事として参加し、病院の新規計画や予算・決算等の承認を受けて医療活動に取り組んでいます。

——医療業界に関する所感をビジネスマンの視点からお聞かせください。

一般のビジネス業界と異なり、独特な世界ではありますね。トヨタグループでは、「改善」は基本の1つですが、病院運営や経営の「改善」に取り組むには、多少難しい面が見られます。しかし、病院といえども経営の視点から損益管理をするのは当然で、私たち事務方の役割は、その点に「気づき」を持ってもらうことと考えております。

搭載した64列CTや最新型の3テスラMRIを導入した。新しく導入したモダリティについて、水谷氏はつぎのように話す。「新しく導入した64列CT「Discovery CT750 HD (GE)」は、胸部CTにおける被ばく線量を従来の10分の1にまで低減することが可能となりました。健診は健常者に行う検査であるため、単純X線撮影に比べて被ばく線量の多いCTによる検査は、これまで倫理的に問題がありました。新しい装置では、このような不安もなくなっています。」

今後は、早期の肺胞上皮癌の検査や大腸内視鏡CT検査などに威力を発揮してくれるものと期待しています」

また、新2棟地下に3テスラMRI「MAGNETOM Skyra (シーメンス)」も導入されている。既存の1.5テスラMRI装置を隣室に設置し、2つの装置を効率よく使い分けながら、精度の高いMRI検査を実施している。

「3テスラMRIが1.5テスラの装置と比べて全ての面で優れているわけではありません。より質の高い画像を提供することももちろん重要ですが、特に安全性に関して、MRI対応の体内医療器具が、3テスラ装置に対応していない場合も多いので、安全性の観点から、使い分けを行っています。このMRIの使い分けについては、基本的に医師からのオーダーによりですが、現場にいる診療放射線技師の判断を優先できる体制をとっています」(水谷氏)



太田剛志 (おおた・たけし) 氏
1957年愛知県生まれ。1983年名古屋国立大学医学部卒。同市立大学病院等を経て、2003年刈谷豊田総合病院放射線科に入職。2014年より放射線治療科部長

放射線治療 「リアック」[Triogy]を導入。 IGRT等、高精度放射線治療を推進

放射線治療科部長の太田剛志氏は放射線治療の現況についてつぎのように話す。
「放射線治療科では、年間280〜300人の新規患者を受け入れており、延べ7400人程度の治療を行っています。頭頸部の腫瘍、乳腺の腫瘍、泌尿器科領域の腫瘍、骨の疾患などを主な治療対象にしています。特徴としては、頭部領域では定位放射線治療による精密な治療、乳腺では外科治療と対となつての乳房温存療法を行っていることです」

放射線治療科では、新2棟建設に合わせ放射線治療装置を更新。VARIAN社製の放射線治療装置「Triogy (トリロジー)」を導入して、より精度の高い放射線治療を実施している。

「当院は、がんセンターのように、がん治療に特化した病院ではありません。ですから、がんの根治だけでなく、姑息的治療も

実施する必要があります。そのようなことを鑑みて、IMRTのような高精度放射線治療から術後照射までオールラウンドに対応できる放射線治療装置を導入いたしました。新放射線治療装置は、コーンビームCTによるIGRT (イメージガイド下放射線治療) を実施することで、X線照射に関する照射後の検証が可能となりました。従来装置と比べ、治療精度と安全性が高い照射を実現しています」

「Triogy」は2015年3月より本格稼働を開始。現在は習熟を兼ねての運用を行っている。
「放射線治療科では、他の診療科と連携を図りながら、地域に根差した放射線治療を今後も続けていく予定です。装置が新しくなったことで、前立腺がんに対するIMRTなども実施していく予定です。高精度放射線治療は精度が高い反面、手間や時間もかかります。姑息的照射なども重要な診療ですから、バランスをうまくとりながら、より質の高い放射線治療を提供していきたいと考えています」

画像カンファレンス

他の診療科との連携を積極的に行い、病院の「総合力」向上に貢献する

放射線科では、他の診療科との医療連携を積極的に行っていることを特徴に挙げています。

「放射線科の特色の一つとして、多くの科と画像カンファレンスを定期的に行っていることが挙げられます。現在は外科、呼吸器外科、産婦人科、小児科、泌尿器科、

脳神経外科、耳鼻咽喉科、集中治療部の8科と定期的にカンファレンスを行い、連携を強めています。

画像カンファレンスを行うことは、放射線科診療の中で最も重要な仕事のひとつです。われわれの持つ情報を主治医や患者に提供することはもちろんですが、それ以外にも診療科が求めている医療情報を知ることにより、画像作成に反映させることが可能となりますし、逆に手術などの診療行為に関する情報をフィードバックして、画像診断領域での新たな知見を得ることもできます。さらに、カンファレンスを行うことにより、多くの科の医師とのコミュニケーションが増え、その結果、多くの医師と放射線科医師が良好な関係を構築できています。

今後は、2015年度には、泌尿器科、放射線治療科、放射線診断科、病理診断科と臨床工学科の5つの組織がデイス



3テスラMRI [MAGNETOM Skyra (シーメンス)]。特に頭部領域、骨軟部領域で高精度な画像診断を実現し、静音化機能や広い装置の開口径がゆとりのある検査空間を実現し、検査時の苦痛を和らげると期待されている



放射線治療装置「Triogy (VARIAN社)」。コーンビームCT機能を搭載し、IGRTやIMRTといった高精度放射線治療を実施できる。同院では、泌尿器科などと連携し、がん診療拠点病院として放射線治療の充実化を目指している

カッションしながら診療に当たる。前立腺ユニットを形成して、前立腺がんの治療を行う予定です。当院にはロボット手術装置も導入されていますが、手術を嫌がる患者もいますので、患者の意向を尊重しつつ、最適な医療を提供していきたい。

このような連携を積極的に進めていくことが、病院の「総合力」を高めることにつながると思っています」

放射線科の今後の展望について、水谷氏はつぎのように話す。
「今後、新しい画像診断のための部屋を設ける予定です。この部屋は放射線科だけが使用するのではなく、他の診療科の医師や研修医なども入室して利用できるような、オープンな画像診断室にしよう」と計画しています。放射線科が、今後とも病院全体の中で重要な役割を担えるよう、努力していきます」

刈谷豊田総合病院 放射線技術科

検査の質の向上と診療放射線技師の育成を推進し、新モダリティを活用して予防医療のさらなる充実を図る

モダリティ運用を統括する放射線技術科の部長である玉木 繁氏と、同科顧問で長年同院放射線技術科を支えてきた佐野幹夫氏らに、放射線技術科の概要と新モダリティの活用について聞いた。



玉木 繁 (たまき・しげる) 氏
1956年愛知県生まれ。1979年東海医療技術専門学校卒。同年刈谷豊田総合病院放射線科入職。2002年放射線科技術副部長、03年放射線技術科副部長。2014年より放射線技術科部長に就任

ET/CT、SPECT合計で約250件を数える。なお、超音波画像検査についても、放射線技術科が実施している。

なお、同科では、近隣医療機関からの委託検査を精力的に受け付けており、CT、MRIの委託検査は月に400件におよぶという。また、同科では放射線科と同様に診療放射線技師の教育にも力を入れており、2015年度も4名の診療放射線技師が入職するという。放射線技術科の教育体制について、同科部長の玉木 繁氏はつぎのように話す。

「放射線技術科では、従来より、患者さん中心の医療 を実践できる組織を目指しています。この姿勢は、当然新人技師にも求められます。しかし、新人技師は多様な撮影業務の習得に加え、先輩技師や他職種スタッフとの人間関係の構築、さまざまな疾患を持った患者さんへの接遇と医療の提供など課せられた業務は多く、これらの業務を全うして、患者さん中心の医療 を実践することは容易ではありません。」

そこで当科では、新人教育のために「プリセプター制度」を導入しています。1人の新人技師(プリセプター)を1人の先輩技師(プリセプター)が担当し、初年度の1年間



佐野幹夫 (さの・みきお) 氏
1953年愛知県生まれ。1975年東海医療技術専門学校卒。同年刈谷豊田総合病院放射線科入職。2001年放射線科技術部長、02年放射線科技術部長、03年放射線技術科副部長。2014年より同科顧問。現在、日本診療放射線技師会副会長 (2014年～)、愛知県診療放射線技師会会長 (2008年～)

で技術や知識の習得、患者さんを迎える心構え、周囲のスタッフとの連携などあらゆる面でサポートすることで新人技師を育てているのです。この教育方針は、手間はかかりますが、着実に成果を挙げています」

放射線技術科では、新2棟オープンに伴い、64列CT、3テスラMRI、IMRT対応リニアックなどのモダリティを揃え、さらにリニアックした健診センターにも多数のデジタル対応モダリティを導入している。これらの新モダリティ導入の狙いについて、玉木氏はつぎのように話す。

「新2棟に設置したモダリティは、健診業務の充実とともに、先端的な画像診断を実施することも目的としています。健診業務を行うことで装置稼働率を高めるとともに、各モダリティの持つ先端技術を活用した診療を推進していく予定です。」

放射線治療装置については、IGRTやIMRTなどの高精度放射線治療が可能な装置を導入しました。がん診療拠点病院として、放射線治療部門の充実を図るのが目的です。64列CTについては、同装置が持つ低被ばく技術を用いて、CTC (大腸内



健診センターに新設されたデジタル乳房X線撮影装置「Selenia Dimensions」(HOLOGIC社製)。フラットパネルによる低被ばく撮影を実現、トモシンセシス機能により、精度の高い乳がん検診を実施している。写真は同装置を背景に放射線技術科副部長の桑山真紀氏

視鏡) や早期の肺がん検診などに活用する予定です。また、デュアルエナジー技術を活用し、胆石や腎結石の成分分析などにも取り組んでいきます」

同院は、新2棟の1、2階には健診センターをリニアールし、2014年10月にオープンさせた。従来のセンターの3倍のスペースを確保し、女性専用のエリアを設けるなど、特に女性受診者に配慮した設計となっている。

同エリアのモダリティとしては、トモシンセシス機能を搭載したデジタル乳房X線撮影装置「Selenia Dimensions」(HOLOGIC社製) を導入し、断層像(3D画像) を追加することによって、高精度な乳がん検診を実現している。放射線技術科副部長の桑山真紀氏は、同装置についてつぎのように話す。

「トモシンセシスは被ばく線量が少くなる

刈谷豊田総合病院 放射線技術科部長 玉木 繁氏

放射線技術科 顧問 佐野幹夫氏に聞く

放射線技術科は、2015年4月で診療放射線技師が50名(分院6名含む) 在籍しており、各診療科から依頼を受けてCTやMRI等の画像検査・放射線治療を実施している。

検査件数はCTが月平均で約4100件、MRIが約1700件、RI関係がP



Interview

刈谷豊田総合病院
健診センター長

なかえ やすゆき

中江 康之氏に聞く

刈谷豊田総合病院の総合内科部長 兼
消化器内科管理部長で、

2014年10月14日にリニューアルオープンした。

健診センターのセンター長に就任した中江康之氏に、
同センターの運営方針と展望について聞いた



健診センター2階の女性専用フロア。パウダールームも完備し、女性が安心して受診できる環境を実現

——リニューアルした健診センターの運営方針についてお聞かせください。

当センターは、豊田会関連の企業や地域住民の疾病予防・健康増進のために設立された施設ですが、その幅広い受診者により快適な環境で健診を受けていただくことをコンセプトに昨秋リニューアルしました。特徴としては、女性受診者に安心して健診を受けてもらうための女性専用エリアを設けたほか、コンシェルジュのきめ細やかな対応によって安心でスムーズな健診をサポートすることが挙げられるでしょう。

また、受付のときにロッカーキーの代わりとなる、ICチップを内蔵したリストバンドをお渡ししますが、これが検査時の本人認証

の役割を果たします。IT技術を活用して最短の受診ルート案内する健診アシストシステムと相俟って、ストレスなくスピーディーに健診が受けられる環境を整えています。

——女性を大きなターゲットとして捉えていますが、どのようなお考えからでしょうか。

特に企業健診においては、企業の社員だけでなく、その配偶者に受診していただきたいと考えています。また、地域住民の皆さんにも、より快適な健診を受けられる環境を整備した点をアピールして、受診者を増やしていきたいですね。そのため、女性専用のフロアを設けただけでなく、健診スタッフも女性を多く配置しています。

——受診者数に関する目標と今後の展望に

ついてお聞かせください。

新しい健診センターは、ハード面では従来施設の1.5倍の受診者に対応できる設備を持っていますが、人的リソースの面も考えて、当面は受診者数年間20%増を目標としています。

人材確保については、特に婦人科や乳腺の健診に対するスタッフを揃え、新健診センターが重点を置く女性受診者増に貢献したいと考えています。

また、がん検診についても、腫瘍マーカーや透視検査だけでなく、CTC（大腸内視鏡）など、さまざまなバリエーションのがん検診を充実させていきたいと考えています。



同院正面入口。同院は地域住民と企業の従業員・家族から絶対の信頼を得ている

医療法人豊田会
刈谷豊田総合病院

刈谷豊田総合病院は、刈谷市、高浜市およびトヨタグループ8社（豊田自動織機、愛知製鋼、ジェイテクト、トヨタ車体、豊田通商、アイシン精機、デンソー、トヨタ紡織）からなる医療法人豊田会により運営されている。新2棟のオープンにより、病床数は737床となった。刈谷市・高浜市・知立市・東浦町・大府市の4市1町および、安城市・豊田市の一部を含む半径10kmのエリアを診療圏とし、地域住民とグループ各社で働く人やその家族、約60万人にとって、医療的な拠り所となっている。

理事長：豊田 鏡郎

住所：愛知県刈谷市住吉町
5丁目15番地

病床数：許可病床数737床（一般病床
731床、感染症対策病床6床）

職員数：1568名（2015年4月1日現在）

と言われますが、『Semia Dimensions』はこれまで見つけることが難しかった自覚症状のない乳がんの発見に貢献しています。将来的には断層像から再構成によって得られる擬似的2D画像と3D画像での運用を取り入れ、被ばくを抑えたいと考えています。これからの乳がん検診には有用なモダリティだと感じています」

前任の放射線技術科部長で、現在顧問を務める佐野幹夫氏は、健診センターのモダリティ運用についてつぎのように話す。

「病院としては予防医療に今後力を入れていきたいと考えており、それがこの新しい健診センターのコンセプトにも生かされています。病気が見つければ即治療に取り掛かれる、という病院併設の健診センターである利点を生かした運営を行っていきます。健診はただ、安価で検査効率重視の健診サービスを提供すればよいという時代はもう終わりました。これからは、健診の質が問われる時代がくるでしょう。また、受診者のニーズの半分が女性であり、その対

応に今回女性フロアを整え、放射線関連の全ての検査や診察において対応（女性診療放射線技師での対応）しています。今回健診に導入された放射線機器は低線量での撮影・検査の対応が可能であり、より低侵襲でのスクリーニング検査に適合した健診センターを目指しました」

放射線技術科の今後の取り組みについて、玉木氏はつぎのように話す。

「現在、被ばく低減に対する患者のニーズは高く、日本診療放射線技師会では『安心できる放射線診療』を国民に提供するための事業として、医療被ばく低減施設の認定を行っています。現在、同認定施設は全国に44施設ありますが、放射線技術科では、この医療被ばく低減施設の認定をとる計画を立てています。デジタル化の推進など、求められる作業は多いですが、ぜひ取り組んでいきたいですね。また、健診センターについては、肺がん検診やレディースドックなど、健診メニューの充実を図っていきたくと考えています」